
桜花五題

北川瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花五題

【Nコード】

N4156N

【作者名】

北川瑞稀

【あらすじ】

いつかの日、桜とともにある想い出。ずっとずっと、忘れない。

◆サイトより再掲載。お題はライト様よりお借りしました。

桜下での想い出

ふわり、ふわりと、桜が舞う。その様子を眺めながら、彼女はほうほうと息をつく。

親子連れの家族たちが、花見をしている声が聞こえてくる。いいなあ、私もコナンくんを連れてくればよかった。と、少しだけ後悔した。

まるで夢でも見ているかのよう。妖艶な桜の花は、人々を惑わす。狂おしいほどに、憎たらしいほどに、その様子を愛した人間たち。なんと滑稽なものだろう。

「…きれいだね」

誰も答えない。わかってはいるけれど、誰かに話しかけたくて、独りでいることが寂しくて。

『…蘭は、相変わらずバカだな』

幼い彼の声が、聞こえた気がした。

……そう、あれは10年前の出来事。父と母が大ゲンカをして、険悪なムードになっていた頃のことだった。

「待つてよ、新一ー！」

「ったく…しょーがねえなー。」

呆れたように溜め息をつきながらも、とたとたと駆け寄る自分を待つてくれる、彼。その心遣いが嬉しくて、自然と笑顔がこぼれた。

「ねえ…どこ行くの？」

「秘密！」

彼は彼女に歩幅を合わせながら、ゆっくりと歩いてゆく。

周りは知らない景色ばかりだったけれど、不思議と怖くなかった。きつと、彼が隣に居てくれているからだ。

陽が傾き、辺りは暗くなってきた。そろそろ引き返さないと、帰るのが大変なのではないか。

少しだけ心配になった彼女は、彼にそう尋ねた。彼は優しく笑いながら、大丈夫だよと答える。

「で、でも…」

「もうすぐ着くし、それに保護者公認だし。大丈夫だって」

保護者公認って？と尋ねようとしたその時、彼の「着いたよ」という声が聞こえた。

「え…」

周りを見渡すと、そこは桃色の幻想的な世界。どうして今まで気付かなかったのだろう、と不思議に思うくらい、そこでは綺麗な桜が舞っていた。

「綺麗だろ？」

「うん：！でも、何でわたしをここに連れてきたの？」

「母さんの提案さ。急に花見したいって言い出すから、蘭もどうか
なと思って」

彼が指差した方向を見やると、彼の母が楽しそうに団子を食べて
いるのが見えた。その隣で彼の父も、同じように団子を食べていた。
仲良さそうな風景。少しだけ羨ましかった。自分の父と母は最近、
ケンカばかりしている。

そんな寂しそうな彼女の表情に気付いたのか、彼はぐいっと彼女
の両頬を引っ張った。

「な、なにするのよー！」

「：オメー、最近元気ないだろ。」

「え！？あ：。そんなこと：ないよ」

「いや、あるだろ。バレバレだぞ？」

「え：」

なんで彼には、全てお見通しなのだろうか。魔法つかいさんみた
いだよね、と園子と笑い合ったのを蘭は思い出した（くすくす笑っ
ていた自分に対して、親友の園子は口を開けて爆笑していたが）。
何でも（ではないにしろ）願いというか、困ってることとかを叶
えてくれる彼。いつも優しくしてくれる彼。彼は彼女にとってヒー
ローで、魔法使いで。とにかく、頼れる存在なのだ。

「：新」

「ん？」

「ありがとう、ね？」

彼はどういたしまして、と優しく微笑む。そしてそのまま彼女の手を取ると、桜花の下へ駆けていった。その勢いにつられて、彼女は引っ張られる。温かい手の温もりが嬉しくて、涙がこぼれた。

新一に気付かれちゃだめだ。きつと心配されてしまう。急いで目を拭うと、彼の温もりを感じない片方の手で、自分の頬をバシッと強く叩いた。赤くなった目を誤魔化すように。自分を元気づけるように。

その仕草に気付いたのか、彼は笑う。

「：蘭は、相変わらずバカだな」

「誰がバカよ？」

「褒めてるんだよ」

何を褒めてるのよ、と彼女が拗ねたふりをする、彼は口を開いた。

「：そ……………けどな」

「…え？」

「いや、何でもねえよ」

風の音にかき消されたその言葉。何言ったの？と問うても、彼は答えてくれなかった。

あるとき彼は、何を言ったのだろう。何回も訊いて、結局教えてくれなかったけれど、今でもその言葉を知りたいと思っている。きっともう忘れてしまっただろうけれど。

ねえ、君はあの春を覚えていますか？10年前の、あの季節のこ
とを。桜下の下で共に過ごした、あの時間を。

『…そんなところも、オレは好きだけどな』

桜下での思い出（後書き）

お久しぶり、です。

この五つのお話は、一話一話が繋がってないので、さらっと読むことができるかなーと思います。

Thanks!

リライト様／<http://lonelylion.nobody.jp/>

君の背中と桜風

もったいない。と、いつも思う。

このピンク色の、桜の花びらが。美しくて、もったいない。

儂いからこそ美しく感じる、という日本の感性をわかっているけれど。

——でも、やっぱり。

もったいない。と、いつも思う。

「桜、もうすぐ満開だね」

「そうだね…」

もうすぐ満開。すなわち、しばらくすれば桜は散ってしまうということだ。

音もたてずに散ってゆく、その儂さに胸が痛んだ。

毎年咲くと知っているけれど、でもやっぱり。散ってしまうのは、何か淋しい。それに、少しもったいない気もするし。

「蘭姉ちゃん…」

「え…何？」

「…は、もうすぐ高3だよね」

突然何を言い出すのかわからない。が、その通りなので、素直に肯いた。

「コナンくんも、もうすぐ2年生だね」

「…そう、だね」

「何かお祝いしようか！」

「いいよ、そんなの。」

「え、でも…」

「ほら蘭姉ちゃん、今年は受験生でしょ？ 蘭姉ちゃんが大学に受かってからにしようよ」

「それだと、大分先の話になっちゃうじゃない…」

そういう風に二人で話している間、隣でコナンと同じ…もしくは少し年上かもしれない、少年たちが駆けて行った。その少年らの姿を見て、蘭は少しだけ不安を感じた。

昔の彼なら、あんな風に遊んでいる筈だったのではないかと。

コナンは、最近変わってしまった。

何が変わったかと言われると、答えに窮するが、何か…雰囲気が変わってしまったような気がする。一人で静かにしていることが多いし、ここ一ヶ月を思い返しても、心からの笑顔を見ていない。

どうしたの、なんて理由を尋ねる勇気は蘭にはなく、日に日に変わっていつてしまう彼を励ますことも出来ない。

だけどせめて、何か出来たらいいと思っっているのだけど、その“何か”を思いつくことが出来なかった。

「コナンくん、は…」

「…ん？ 何？」

何を考えて、求めているの？ とか。何があったの？ とか。

訊きたいことはたくさんあるけれど、彼の顔を見ると、訊きたくても訊けなくなってしまう。

「…うん、いいの」

「…そう」

今訊かなきゃ意味はない、とわかっている。

——そう、わかっているのだ。だけど、自分には止めることは出来ないだろう、ということもわかっている。

「夕食、何にしようか…。コナンくんは何がいい？」

「僕は何でもいいよ」

遠慮がちに笑う彼に、彼女は悟った。やっぱり、と。

彼自身は気付いてないのだろうか。自分の変化に。

自分は買い物してから帰るが、どうするのかと訊くと、彼は「ちよっと用があるから、博士の家に寄ってくよ」と答えた。

“用”が何なのか、彼は昔から教えてくれることはなかったけれど、今は彼女にも何となくわかる。

(でも、まだ騙されてあげる)

散ってゆく桜はもったいないと思うのに、過ぎてゆく時間はもったいないとは思わないのか。蘭はコナンに何も言わないまま、分かれ道で別れた。

またすぐ会えるとわかっているけれど、その別れが少し名残惜しくて、彼女は振り向いた。

彼の小さな背中、その小さな体とは裏腹に、速く速く進んでいく。

その後ろ姿が、誰かに似てるなと思い、記憶を探てみると、一人の少年に辿り着いた。その考えを信じたくなって、信じたら彼も

今すぐ消えてしまいそうで、首を振って追い払う。

その瞬間、強い風が吹いて目を閉じた。風が止んで、彼女が次に目を開けたとき彼の姿はもうなく、辺りは桜の花びらがひらひらと舞っていた。

散る、散る

「きれーだねー…」

「そうだな…」

散る、舞う。桃色の花びらが、ふわり、ふわりと。風に吹かれて、水面に落ち行くその様を、河原に座り込み、二人でぼーっと眺めた。

（この桜のように、私が消えていってしまおうとしても…——）
（きっと君は、私のことを忘れないのだろう）

それは、自惚れでもエゴでもない。彼の性格を一番良くわかって
いるのは、多分自分だから。

彼のことを良く言おうと、何かに一筋で、真っ直ぐ。悪く言おうと、
バカ。

「…新二」

「ん？」

優しく微笑んで自分を見る彼に、彼女は何も言えない。言っては
いけない、気がした。

「平和だね」

「ああ、そうだな…」

二人して、芝生の上に寝転んで、空を仰ぐ。四つ葉のクローバー
探そうよ、という彼女の言葉を、彼は快く受け入れた。

手探りで、静かに、ゆっくりと。時間は過ぎてゆく。

「あ…」

「どうした？ 見つけたか？」

「…うん、違った」

「そうか」

ごめんね、と心の中で謝る。本当は見つけたのだ。幸せの、四つ葉のクローバーを。

嘘について、気持ちいいとは思えない。だけどつかなければならぬ嘘もある。

嘘には3種類あると、誰かが言っていた。

一つ目は、誰かを騙す嘘。

二つ目は、自分を守る嘘。

そして三つ目は、誰かを庇う嘘。

今の私の嘘は、誰かを騙すためでもあって、自分を守るためでもある、嘘。誰も得をしない。そんな嘘。

彼をちらりと見る。ほらね、やっぱり。彼は一生懸命探してくれている。そんな彼を裏切らなければいけない自分を、どうか赦さないでほしい。

目を閉じ、そっと願った。

「…忘れてね、お願い」

四つ葉のクローバーに願う、小さな秘密。やっとの想いで紡ぎ出した言葉は、空の彼方へと消えていく。

散って、揺れて、消えて。

桜の花がいつしか散り尽くしてしまうように、私の命も消えてゆ

く。

忘れないで、どうか。この桜の花を。

忘れてね、どうか。私のことを。

彼女は、四つ葉のクローバーの葉の一枚を、プチリと千切り取った。

髪に桜の欠片を

「…あ」

「ん、どうしたの？」

「髪に、桜の花びらが…」

「え？…ごめん、取ってくれない？」

「はいはい」

蘭の長い綺麗な髪から、ひょいっと掴み取る。ピンク色の小さな花びら。一つひとつで見たら普通なのに、たくさんあると何で綺麗に見えるのか不思議に思った。

「取ったぞ、蘭」

「ありがと」

ふわり、と笑う蘭はまるで天使のようで。周りの男たちの視線が集まっているのを感じる。

こいつはオレのものだ、という牽制の意も込めて、彼女をぎゅっと引き寄せる。

「し、新一…！」

何するのよ、人が居るところで…と文句が聞こえてくるが、知らないふり。赤くなった顔も可愛いよ、と耳元で囁く。

「う…」

蘭が可愛い、という言葉に弱いのは知っている。それでも負けじ

と見つめる蘭の頭を、ポンポンと叩いた。

ちらっと後ろを見る。さっきの男たちは、すでに去っていた。

———独占欲。誰にも触らせたくない。閉じ込めておきたい。
そんな欲望が、身を支配して。

バカだとわかってはいるけれど、バカなことをせずにはいられない。
例えば、さっきの牽制とか。独占欲とか、ヤキモチとか、性欲とか
だって。バカバカしい、いつも思う。

考えているのは、お前のことだけ。考えられるのは、お前のこと
だけ。

バカだ。本当にバカ。推理バカ改め蘭バカだよ。

「…新一…?」

どうしたの?という問いが、その唇から紡がれる前に、彼女の唇
に自分のそれを重ねた。蘭は一瞬驚いた顔をしたものの、そつと目
を閉じた。

自分がこうも彼女に狂ってるのは、もしかしたら桜の魔法にかか
っているのかもしれない…という、さらにバカバカしい考えが浮か
び、自嘲した。

そして再び君の元へ

ある日の真夜中。雲が広がり、周囲は暗い。さらに夜霧が出ていたので、何も見えないと言ってもいいだろう。道路も家も静まり返っていて、どんなに微かな音でも響いてしまいそうな、そんな夜。

“毛利探偵事務所”と書かれたアパートの三階にある毛利家でも、それは同じ……だった。たったの、今までは。

廊下をひたひたと歩く足音。この音の大きさだと、小学生くらいの足音だろうか。

その足音は、とある部屋のドアの前で止まる。なるべく音がたたないよう気を使いながら、静かにドアを開けた。

部屋は真っ暗で何も見えないが、寝息が聞こえてくるので、人が居ることはわかる。

足音は躊躇せずに部屋の中へ入る。そして、部屋の主の横で止まった。

「……蘭」

それが部屋の主の名前なのか。少年の声は、愛おしそうに、少しだけ悲しそうに少女の名を呼ぶ。

名を呼んでも、少女……少年より10歳は年上であろう少女は、何も反応しない。時折寝返りをしたり、「ううーん」という気持ち良さそうな声を出すだけだ。

少年はほっと溜め息をつくと、口を開いた。

「…さよなら、蘭」

さよならとたった一言、たったその一言だけ。それだけしか言わず、あとは去る気配もない。

少年のその顔はまるで能面のように無表情で、暗闇の中で見るととても恐ろしく見えた。

———だけど、少しだけ悲しくも見えて。

彼の別れの言葉に、何か意味が…何か悲しい理由があるのだろうか、と思ってしまう。

そもそも、何故今別れを伝えなければいけないのか。少女が起きてからでいいではないか。

その時、ふと少女の瞳が開いた。驚きを隠せない顔で、少女の口は少年の名を紡ぎだす。

「コナン、くん…?」

少年は一瞬顔が強張ったが、すぐにさっきの表情…よりも優しい表情に戻る。

そんな少年に、少女はただただ自分の疑問を投げつける。

「今、何時?」

「丑三つ時。幽霊とかが出る時間。」

「幽霊なんて信じてないくせに、そんなこと言わないの!」

「…蘭姉ちゃん、もしかして怖いとか?」

「全然怖くないわよ!」

「………」

「どうかしたの?何かあった?」

「…ううん、特に何もないよ」

「具合悪いとか…」

「違う違う、大丈夫。ボクは普段通り元気だよ。」

「眠れない？」

「そうなのかな…うん、そうかも」

「…どこかに行くの？」

「え？」

「だって、寝間着じゃないじゃない」

少年の服装は、少女のように寝間着ではなく、白いワイシャツに青いジャケット、赤の蝶ネクタイという格好だ。外に出ても、多少目立つが別に問題はない。

少年は、その問いには答えなかった。きっと答えられなかったのだろう。

「…行くの？」

「……………」

「死なないで、ね」

「え、」

「帰ってきてね…新一」

「何、で…」

新一。それは少年の名なのか。さっきまでコナンと呼ばれていたではないか。

意味がよくわからないが、その名を呼ばれた途端、少年がうろたえ始めたことから、何かあるのだということはわかる。

「…知ってたよ」

ポツリポツリ、と少女は話す。

何を？何を、知っていたのだろう。

「ずっとずっと…知ってた」

「…蘭」

少女の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちる。少年の小さな手はその涙を拭った。

「ごめんな」

「…謝らないで。謝っちゃだめ。」

「ああ」

「帰ってきたら殴ってあげるから、覚悟しておきなさいよ！」

「…ああ」

「だから…だから…」

「…行ってくる」

少年は、立ち上がった。少女はその背中を見送る。

ついさっきまで雲に隠れていた月が姿を現したようで、淡い月光がカーテンの隙間から入ってくる。

その月の光に少女は祈る。手を組んで、目を閉じて。“帰ってきますように”と。

まるで映画のワンシーンのようだな、とか。あの蘭という少女が綺麗だったな、とか。

色んな気持ちや考えが折り重なって、しばらくぼーっとしていた。知っている声が聞こえてきて、我にかえる。

『何してるんだ？』

『何だ、怜か。…ちよつと、ね。』

『また人間界を覗き見か？』

『…そうだけど』

『相変わらず人間界のことを覗くのが好きだよな』

『悪い？』

『いや、別に。俺もそういうの嫌いじゃねーし。で、何見てたんだ？』

『えっとね…』

何て言おうか。何て言えばいいか。

さっきの、映画のワンシーンのような出来事を、一言で表す単語が見つからない。

いや、別に一言で表さなくてもいいかもしれない。それどころか、言葉に表さなくてもいいかもしれない。

だって、この出来事を誰かに話してしまったら、少しでも勿体無い気がするから。

だから秘密。少年と少女（と、覗き見してしまった私）だけの、秘密。

あんなところを覗き見しちゃったお詫びに、私も祈ってあげる。特別よ？ “神様” からの祈りなんて、そうそうないわ。

少年が、再び少女の元へ戻ってこれますよう。
少年らに、至福の光を。

どうか。桜が咲く、あの季節までに。

そして再び君の元へ（後書き）

語り手の子は、“神様”：みたいな存在といえますか、人とはかけ離れた存在の子、という設定でした。わかりにくくてすみません…。私にしては珍しい感じの設定です。

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4156n/>

桜花五題

2010年10月9日18時04分発行